
ゲート ～白き英雄～

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲート ～白き英雄～

【Nコード】

N0439Y

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

ゲームの世界ゲート。

人間と魔族が争うその世界へと導かれた白雪冬華は、英雄として魔族と戦う事に。

英雄として魔族との戦いに身を投じていく。

第1話 登録

「何で私が！」

白雪冬華^{しらゆきとうか}は激怒していた。

担任の熊谷に呼び出され、日直である黒兎裕也^{くろとゆうや}と次の授業の準備をしなければならぬからだ。しかも、その裕也は教室に居らず、クラスの男子に聞いた所、腹が痛いからと出ていったと、言う。だが、保健室に行けば来ていないと言われ、他の生徒に裕也を見なかったかと、聞いて回る羽目になったからだ。

拳を振るわせる冬華は、乱暴に屋上の扉を開いた。しかし、そこに裕也の姿は無かった。屋上に行くのを見たと言う有力な情報を掴んでいただけに、冬華は落胆し両肩を落とす。

「全く、黒兎の奴、何処行っただ」

ボソリと呟いた冬華は、一通り屋上を見回した。

「黒兎の奴、ここに居るって情報があったんだけど……」

自らの集めた情報を信じてここまで来た為、諦めがつかず、屋上全体に聞こえる声で叫ぶ。

「おーい！ 黒兎！ 居るんだろ！ 十秒待ってやるから、出てこーい！ いーち……にーい……」

ゆっくりと数を数えるが、黒兎は姿を見せない。

「なーな……はーち……」

ここまで数えても出て来ない。情報はデマだったのか、と半分諦め気味で「きゅーっ」と、告げた時、給水タンクの後ろからボサボサの寝癖頭の裕也が姿を見せた。が、同時に「じゅうつ!」と、冬華が発し、ニコツと笑みを浮かべ、

「時間切れ」

と、裕也の顔を真っ直ぐに見据えた。

彼、黒兎裕也と冬華は、向かいに住んでおり、幼い頃からのお互いの事を知っている仲だ。親同士も仲がよく、子供の頃に何度か遊んだ事があるが、いつ頃からか裕也の方が冬華を避ける様になり、冬華も自分が避けられていると知り、裕也に干渉しなくなった。あの頃、少なからず冬華は裕也に好意を寄せていただけに、ショックが大きかったが、今では何で好意を寄せていたのか、裕也を見ては自問している。

表情を引き攣らせる裕也に、拳を握りながら静かに歩み寄る冬華は、

「随分探しちゃった。今まで何処に行ってたのかなあ？」

と、笑顔で威圧する。

相変わらず引き攣った表情を浮かべる裕也は、お腹を右手で擦り、

「何処って……ちょっとお腹が痛くて……」

「だったら、保健室に居ようよ。私、凄く走り回っちゃったよ？」

相変わらず、笑顔で威圧する冬華に、作った様な笑みを浮かべる裕也に、冬華は少しだけ落ち込んだ。どうして、そんな無理に笑みを浮かべるのかと。

「それで、俺に何の用？」

右手を軽くあげ、まるで友達に話し掛ける様なノリの裕也に、冬華はため息を吐きたくなったが、熊谷から言われた事を思い出し、

「そ、そうだった！ あんた、今日日直でしょ！ ちょっと、来なさいよ！ 準備するモノがあるんだから！」

と、声を大にする。

だが、一方の裕也はキョトンと、した表情を浮かべ、「日直？」と、マヌケな声をあげた。それから、数秒の間が空き、思い出したのか、

「そう言えば、そうだったような……で、何で、白雪が？」

日直である事を思い出した裕也だったが、肝心の相手が冬華である事を忘れて居た事に、冬華は更に腹が立った。そのため、怒りのこもった声で、つい「私も、日直だからよ」と、言ってしまった。何ムキになってるんだろうと、言った後で後悔し、小さくため息を漏らしたが、裕也には聞こえなかったのか、何やらボソツと呟いていた。

そんな裕也に呆れた表情を浮かべ、

「全く……ほら、パソコン室行くわよ」

と、視線をそらした。すると、間の抜けた声で、

「パソコン室？ 何で？ 今日、パソコンを使う授業は無いはずだろ？」

「知らないわよ。熊谷が使うって言ってたんだから、熊谷に聞きなさいよ」

面倒臭そうに冬華がそう言うのと、

「先生を呼び捨てにしているのか？」

と、真面目な顔で言う。変な所で真面目な裕也に冬華は更に面倒臭そうに、

「いいのよ。私、あいつの事嫌いだから！」

と、背を向けた。

熊谷は、四十を過ぎた小太りの男性教諭。何かにつけて女子の体に触ろうとするセクハラ教師だ。冬華も、何度か触られそうになった事があったが、その度回避してきた。その内の半分以上が裕也のおかげで回避出来たモノだった。別に裕也は助ける為に取った行動じゃないはずだが、結果的に冬華を助ける形になっている。その証拠に、他の女子も裕也にセクハラされそうになったのを助けてもらったと、冬華はよく耳にする。

だが、冬華が熊谷を嫌う理由はそのセクハラではなかった。

冬華が熊谷を嫌う理由は、女子を何かと助ける裕也に対して嫌がらせをするからだ。裕也自身はそんなに気にしていないみたいだが、冬華にとってそれは許せない行為だった。

「しょうが無い……何かと文句を言われる前に、準備しておくか……」

そんな冬華の気持ちなんてこれっぽっちも知らず、のん気にそう言う裕也に

「全くね。はい、鍵」

と、パソコン室の鍵を手渡す。その行動に裕也は首を傾げる。

「……鍵を渡して、お前はどのような気がする？」

「もちろん、教室に――」

思わず本音を漏らした冬華をジト目で裕也が見つめる。

「おい。俺に全部させる気か」

「そ、そんなわけ無いじゃない！ と、トイレよ。トイレ」

つい口から出た言い訳に、赤面する冬華は、逃げる様に屋上から飛び出した。

言い訳とは言え、トイレに行くと言ってしまった事を後悔し、そのままトイレに逃げ込んだ。

「あうーっ！ 私のバカバカ！ 言い訳するにしても、もっと他に色々あったじゃない！」

一人大騒ぎする冬華。幸い、このトイレは使用者が少なく現在人はいなかった。

一通り、騒ぎ終えた冬華は、息を荒げ肩を落とし両手を洗面器の手摺に置いたまま俯いていた。

「はあ……絶対、変な奴だって、思われた……。てか、何言ってるのよ！ も、もう、私はあんな奴の事……」

自分に言い聞かせる様に何度もそう呟き、顔を洗った。

「ふうー。んっ。大丈夫！　いつもの私だ！　大丈夫、大丈夫！」

ハンカチで顔を拭いて、何度も自分を励ましてからパソコン室へと移動した。

第三校舎三階の奥の教室。既に明かりはついており、裕也が居るのが分かった。ドアの前に立ち止まり、深呼吸をした。

「スーハァー。だ、大丈夫！　平常心、平常心」

何度も言い聞かせ、ゆっくりと戸をスライドさせた。

「失礼しまーす……」

静かに教室内を見回すが、裕也の姿は無かった。安心した様な、残念な様なそんな気持ちに、ため息を吐いた冬華は、もう一度教室を見回す。

「いないじゃない……何処に行ったのかしら？　んっ？」

不意に電源の入ったパソコンが目にとまった。裕也がつけたのだろうと、そのパソコンに近付く。そして、モニターに映ったネットゲームの画像に引き攣った笑みを浮かべる。

「裕也の奴……また、こんなゲームして……面白いのかしら？　ワールドオブジェンドって……聞いた事もないゲームだけど……」

パソコンの前にあった椅子の高さを、一旦一番高くしてから、腰を下ろしそのまま一番下まで落とした。特に意味は無いが、何と無くクセになっていた。

「……裕也、このゲームやってるんだよね……。ふふっ。私も始めようかなあ。そしたら、ネットの中で、裕也と……」

妄想の世界へと旅立つ冬華だが、すぐに我に返り周囲を見回した。

「だ、誰もいないわよね。今の内に登録しちゃおう」

説明も読まずに冬華は登録ボタンをクリックした。

正直、冬華がこの手のゲームに手を出すのは初めてだった。別に、ゲームが嫌いなわけじゃないが、ネットゲームは極力避けていたのだ。人と交流しながらゲームを進めていくと、言うのが苦手だったからだ。

モニターにゲームのタイトルとパスワード画面が映る。

「えっと、新規登録で、いいんだよね？」

分からないながらも、新規登録ボタンを押すと、画面がキャラ作成画面へと移る。

「ユーザーネーム？ 自分の名前でもいいかしら？ と……う……か……つと。変換！」

ぎこちないながらも、キーボードを見ながら入力を進める。

「性別は、女。じゃないと、裕也に分かってもらえないし……背丈は、標準より低めかな？ 戦闘タイプ？ 私は中距離かな？ 後は、目がこんな感じで、口がこれでしょ、髪がこんな感じで……」

ブツブツと独り言を言いながらキャラ作成を続ける事数分――

「出来た！ 完璧！ 私の分身よ！ ふふっ。これなら、裕也もに
気付くはずよ！」

淡い期待に胸を躍らせながら「次へ」のボタンをクリックすると、
選択肢が二つ出る。人間軍か、魔王軍かと言う選択肢だった。だが、
その選択肢に、一切の迷いもなく、冬華はクリックする。

「人間軍に決まってるじゃない！ 正義は勝つのよ！」

速攻で人間軍を選択した冬華はそのまま登録完了のボタンをクリ
ックした。と、同時にモニターが眩い光を放つ。

「眩しい！ ちょ、何？ 一体？」

『登録完了しました。これより、ゲートを開きます』
「げ、ゲート？ えっ、ちょっと、何言って――！」

困惑する冬華の目の前で、モニターに大きな穴が開く。全てを吸
い込んでしまいそうなその穴に、驚く冬華だが、動く事さえ出来ず、
そのままゲートの中へと吸い込まれた。

ゲートが消えると、後に静けさだけが残され、パソコンの電源は
自動的に落ちた。

第2話 世界を救う英雄

「キヤアアアアアッ」

闇の中に響く冬華の声。

だが、声は返って来ない。ゆっくりと瞼を開くと、そこに一筋の光が見えた。冬華の体はその光に吸い寄せられる様に、光の方へと落ちていく。

風が頬を撫で、もうすぐ出口なのだと分かった。鼻をくすぐる薬品の匂いと焦げ匂い。時折呪文の様なモノも聞こえた。その声は徐々に大きくなり、眩い光が視界を遮った。目を伏せると、お尻を地面に打ちつけ、「イタッ!」と声をあげた。すると、周囲がザワメク。

「ほ、本当に現れたぞ!」

「きゅ、救世主様だ!」

「しかし、女ではないか」

「本当に、救世主様なのか?」

次々に聞こえる歓喜の声と不安そうな声が入り混じる。何がなんだか分からず辺りを見回す。

間隔を開けて置かれたロウソクの明かりの向うに、人影が複数。皆、黒いローブを着ており目を凝らさなければよく見えない。

「あいたたッ……全くなんなのよ」

お尻を擦りながら立ち上がった冬華は、自分の足元に描かれた妙な模様気付いた。冬華を中心にして描かれた円に、わけの分からない模様が描かれ、まるで魔法陣の様だ。

「何処よ、ここ……」

更に周囲を見回す。部屋は人が複数は入れるほど広く、立てられたロウソク以外他には何も見当たらない。ただ、魔法陣の周りに真っ黒な塊と、割れたガラス片が散ばっていた。ここで何が行われていたのか、全く検討がつかない冬華に、暗がりから一人の男が歩み寄る。

フードの奥に見える顔は冬華と同じ歳位の若い男だった。穏やかな表情をしているが、その眼差しが一瞬殺気だった。思わず身構える冬華に対し、若い男は被っていたフードを左手で外し、

「そう身構えないでください」

「そう言うなら、まずその袖口に隠した刃物を捨てなさいよ」

冬華の言葉に周囲がどよめき、若い男はローブの袖から右手を出す。その手に握られた短刀を床へと放り、

「流石です。あなたこそ、この世界を救う英雄様です」

若い男をジッと睨む。

「そう、睨まないで頂きたい。我々も、あなたが本当に英雄様なのか試したのです」

「……もし気付かなかったら、どうするつもりだったの？」

「それは、あなたの考えている通りです」

淡々とした口調でそう答えた若い男に、冬華は「最低ね」と呟いた。

そもそも、男が刃物を持っていると気付いたのは偶然だった。ほ

んの一瞬だけ見せた、男の殺気だった目。それが疑念を生み、背中に右手を隠そうとする男の行動に、確信を持った。

奥歯を噛み締める冬華は、僅かに後退り、更に警戒する様に周囲を見回す。

キョロキョロと辺りを見回す冬華に、若い男は跪く。

「な、何のつもり！」

「今までの無礼をお許しください。英雄様！」

突然と言い頭を下げる男に、冬華は啞然とする。今まで張り詰めていた緊張感がプツンと途切れたかの様に次々と歓喜の声をあげる。

「本物の英雄様だ！」

「これで、世界は救われるぞ！」

「今すぐ国王に連絡するんじゃ！」

「今宵は宴じゃ！」

声を上げ部屋を飛び出していく人々。あまりの事に言葉を失う冬華。そして、最後には冬華と若い男だけが部屋に残された。

呆然と立ち尽くす冬華に「アハハ……」と、困った様に頬を掻く若い男。お互いの視線が交わり、冬華はジト目を向ける。

「何なのよ。一体？ さっきまでの緊迫感は何？」

「皆さん嬉しいんですよ。英雄様を召喚出来た事が――」

「……あのさ、さっきから、英雄英雄って言ってるけど、一体何の話なの？ あと、ここは何処？」

落ち着いた所で、冬華はそう切り出した。その言葉に若い男はスツと立ち上がり、然も当たり前前の様に答える。

「ここはイリーナ城です。ザビット国王の率いるゲート一堅い防壁を誇る城ですよ」

「ザビット国王？」

冬華が首を傾げると、若い男はニコツと笑みを浮かべ、

「英雄様は、この世界の事をまだご存知無いのでしたね。まず、この世界の事を、説明しますね。ここは、ゲート。五つの大陸からなる惑星です」

「ゲート？　それが、この星の名前って事ね？」

「はい。そして、ここは五つの大陸の内、二番目に大きな大陸、ゼバリーク大陸です」

「ぜ、ゼバリーク大陸？　何だか言い難い大陸名……」

冬華の相槌に、若い男は「あははは……」と苦笑し、右手で頬を掻きながら、

「それじゃあ、説明を続けますね？」

「ご、ごめん。話を中断させて……」

「えーえ。そのゼバリーク大陸の東側の険しい山脈地帯に城を構えるのが、我等が王、ザビット国王が納める国、イリーナ王国です」

誇らしげな彼の顔に、冬華はただただ苦笑した。

そんな冬華に、もう一度ニコツと笑みを浮かべた若い男は、小さく頭を下げると、部屋を出て行ってしまった。

一人部屋に残った冬華は、小さくため息を吐いた。

理解出来たのは、この星の名と今何処にいるかと言う事だけ。ザビット国王とはどう言う人で、何で自分が英雄と言われているのか、など、不透明な事ばかりだった。

少しだけ膨らんだ胸の前で腕を組んだ冬華は、もう一度小さくため息を落とすと、細目にしながら、目の前に浮かぶ一人の少女の顔を見据えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0439y/>

ゲート ～白き英雄～

2011年12月7日00時34分発行